

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国歴史教育研究協議会

(代表者 南 和男 会員数 約16,200人)

T E L 0422-51-4554

今年度の共通テストについて、1の「前文」では本試験「日本史A」と「日本史B」の今年度の平均点など全般的な概略について、2の「試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価」では問題の内容・程度・設問数・配点・形式などの科目別の意見や要望について、3の「総評・まとめ」では全体的な要望について述べる。

1 前 文

平均点は、今年度は「日本史A」が42.04点、「日本史B」が56.27点であった。前年度に比べて平均点は「日本史A」が3.34点下がり、「日本史B」が3.48点下がった。これにより、「日本史A」と「日本史B」との差は14.37点から14.23点に縮小した。「日本史B」との共通問題である第2問と第4問は「日本史A」を高等学校で学習してきた受験者にとって、社会経済や史資料を通じて外交に関する内容を丁寧に学習していれば、解答しやすい内容であったと思われる。例年要望してきたことであるが、「日本史A」と「日本史B」との平均点の差ができるだけ縮小されるような配慮がなされていればよかった。以下、それぞれの日本史の試験について検討した結果を申し述べる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

日本史 A

「日本史A」について、設問数は大問5題、小問32題の構成であった。例年通りの32問構成であった。出題範囲は幕末から戦後までで、日本史Aの学習範囲内で適切な設定であった。幕末に関連する問題が昨年度の3問から2問となったが、時代横断型と単独での出題も見られた。共通テスト4年目の今年も、昨年同様に多様な史資料を用いた出題が多くみられた。また、探究学習を見据えた生徒の発表原稿やレポートといった形式が随所に取り入れられた。地図を用いた出題は昨年同様見られず空間認識を問う観点が出題上不足している。

出題形式別では、正文選択が7題、正誤組合せが5題、年代配列が4題、語句の組合せ、正文組合せが6題、誤文選択が3題となった。歴史総合等を見据えた新傾向の形として史資料の組合せが1題、人物・事項の組合せ、語句の選択問題は出題されなかった。また、昨年に比べ正文選択型の正誤問題が増加した。年代配列については因果関係や年代ごとの理解によって受験者に正答を選ばせることもできて歴史的な思考力を問う問題として適切な形式である一方で、今年の出題の中にはやや細かい知識を問うものもみられた。

時代別では、時代横断型の出題が11題と最も多く、時代ごとの知識・理解を基に、各時代を比較して多面的・多角的な視野から思考し、判断する力が求められた。各時代を問う問題では、幕末の出題では1題、明治の出題では8題、大正の出題では2題、昭和の出題では4題、戦後の出題では6題であった。昨年に比べ、戦後期に関する出題が微増し、日本史Aの学習範囲からの出題バランスとして適切である。戦前期に偏った出題でないことで、戦前と戦後の関係性を問っている。一方で戦後期は平成までは出題されておらず、歴史総合の大項目D「グローバル化と私たち」の学習範囲を考慮すれば次年度以降は出題されていくべきと考える。

分野別では、多分野に跨る混合問題が14題であり、分野ごとの知識を理解した上で、各時代を多面的・多角的な視点で概観する力が求められた。各分野を問う問題では混合問題も含めると、政治が9題、社会経済20題、軍事外交9題、文化が9題であった。今年度は社会経済・文化両分野からの出題が多く、特に後者は昨年から大幅に増加した。軍事外交分野は昨年より若干少なかった。昨年に比べて政治分野の出題は大きく減少し、やや偏った出題となってしまった。以下、詳細を見ていくものとする。

第1問は会話文形式で明治から昭和・戦後までを横断して問う出題であった。問1は明治時代の政治と民衆の反応を問う正文選択問題である。単に政策の名称を覚えるのではなく、併せて当時の反応や影響をおさえておく必要があることを示唆した良問であった。問2は正誤の組合せ問題であった。史料を丁寧に読むことで判断ができる問題であるが、Xの文章は屯田兵に関する知識を活用しないと判断ができない面がある。史料と知識の活用という点で共通テストらしい出題であった。問3は語句の組合せ問題であった。ただし、用語ではなく会話文から「坪内逍遙」や「二葉亭四迷」、「写実主義」や「言文一致体」など文化史に関する内容を理解しておかなければ正答に辿り着きにくい。会話文を読むことの重要性や文化史学習の方向性が示された。問4は2つの史料を読み正文の組合せを判断する問題であった。選択肢のc・dは、思想や文化に関する基本的な知識問題であるが、日中戦争期の判断はやや難しかった。今年の日本史Aでは例年に比べ文化に関する出題が多く、受験者に幅広い分野を学習する重要性を改めて認識させるきっかけになった。問5は年代配列問題。それぞれの選択肢から時代を判別できるキーワードが見えれば解答ができる。日頃の学習でも年代に固執せず、出来事の流れを意識できるかが重要といえる良問であった。問6は正文選択問題であった。③は「トーキー」について理解しているか、④は会話文から「1934年から1960年」を見つけ、東海道新幹線の開通を誤りと判断する必要がある。社会経済や文化を複合的に把握するという点から難問であったと考えられる。問7は語句の組合せ問題。一つの法律について時代を横断して学習できているかが問われる良問であった。第1問では、資料と学習内容をあわせることや文化史学習に政治・社会との関連性をもたせることなど、歴史総合や日本史探究の授業で求められていることが多岐にわたって問われた。

第2問は日本史探究部の生徒の発表原稿を基にした明治時代に関する出題で、日本史Bとの共通問題。新課程の歴史総合や日本史探究を意識していると考えられる。問1は語句の組合せ問題。Aについては基礎的な知識を問うているが、出題の発表原稿を発表レポートや発表時に用いたポスターなどとして、地図を盛り込み、地名を判断させることも考えられる。近年空間的な把握に関わる出題が少ないこともあるので検討をお願いしたい。イは、永井荷風の『洋服論』から判断できる。問2はグラフに関する正誤の組合せ問題。丁寧に読むことで容易に解答ができたであろう。Yは関税が上がれば輸入は減少するというを理解した上でグラフの読み取りを行えばよく、基本的な出題であった。問3は正文選択問題。国立銀行条例に関する内容や史料を丁寧に読み取ることで解答が可能な問題であった。問4は正文組合せ問題。基本的事項を問われ、文化史が苦手な受験者にとっても解答はしやすかったと考えられる。ただ、「政教社」や「民法」については令和3年度、令和4年度と、近年頻繁に出題されている。選択肢としては避け、平民主義や国粋主義などの考え方について問う形も考えられる。

第3問は明治期以降の教育と社会の関係をテーマとしたレポートを題材に、社会経済や文化、政治について出題された。問1は語句の組合せ問題。レポートの前後を読むことで解答ができる基本的な問題。問2は表を参考にした教育制度の変遷に関する正文選択問題。表の読み取りだけでなく義務教育の年限や大学令など知識をあわせて解答する良問といえる。ただ、1つの資料と知識の組合せという形式は他の設問でも見られるので、表、義務教育における就学率に関するグラフ、学童

の集団疎開の様子の写真など、他の資料を複合的に読み取らせる出題もできよう。問3は正文選択問題。時代が横断している出題であった。「唱歌」は受験者にとって理解が薄くなりがちであったとも考えられる。問4は学制および史料に関する正誤の組合せ問題。史料の読み取りと学制に関する基本的な知識で解答が可能な問題であった。問5は正文組合せ問題。立憲政友会の成立前後の内閣ごとの動きについて基本的な内容が問われた。史料の読み取りによらずとも解答できたであろう。立憲政友会が従来の政党との違いについて、当時の元老の影響力などについて史料を用いたり、レポートの考察として正文選択させたりすることもできよう。問6は明治時代以降の学問に関する年代配列問題。2024年の新紙幣について意識のある受験者であれば登場人物についても学習しやすかったと考えられる。問7は誤文選択問題。解答は「職業婦人」と大正デモクラシー期を関連付けて判断できれば平易であった。このようなレポート形式の出題では、まとめの考察を先に載せ、そこからさらに学習を深めるために適している史資料を選択させるなどの出題が考えられる。第3問は、テーマについて整理・理解ができている受験者にとっては取り組みやすい問題が多かった。

第4問は二度の世界大戦後の日本と国際社会をテーマに、発表準備中のプリントを参考に近現代の内容が総合的に問われた。問1は新たな出題形式といえる史資料の組合せ問題。ワシントン会議の内容を活用しながら、Xについて史料3の「主力艦」からワシントン海軍軍縮条約を判断し、Yについてはワシントン会議で廃棄された条約から石井・ランシング協定を念頭に史料をみていけば解答できる。基本的ではあるが、複数の史資料の組合せによる考察の重要性を意識した指導が必要であろう。問2は正文選択問題。内閣ごとに政策が整理されていれば比較的解答しやすい。問3は史料に関する正誤の組合せ問題。史料の丁寧な読み取りが求められ、知識よりも技能的な要素で解答が可能であった。ここでは発表における史料の紹介という形式であるので、例えば「満鉄以外」の箇所を読み取らせた上で満鉄の路線を地図で把握させ、なぜ満鉄以外の鉄道保護は中国に任せ、満鉄は日本が保護するのか、満蒙の重要性について考察した内容などを正文選択形式で出題するとより思考力重視の出題になるだろう。問4は当時の外交における基礎的な正文組合せ問題。過去問でも頻出の内容であり、受験者にとって解答しやすかったであろう。問5は占領期の社会や文化に関する誤文選択問題。正答の③は文章の前半と後半で矛盾が見つけやすく、比較的解答しやすかったと考えられる。問6は戦後の日米関係に関する年代配列問題。Ⅲの条約について判断が難しかったと思われる。問7はメモに入る語句の組合せ問題であるが、B部分は、今回の出題形式では従来のリード文と下線部による出題と本質的には変わらない。生徒が作成したプリントをより活用していくことも考えられる。例えば、問1のような史料を選択させる形式や下線部eに関しては疑問文で載せてあるので、その解答となる内容が読み取れる史資料を選択させてもよい。また、プリントの考察という箇所を空欄とし、生徒のメモ内容と別に用意した史資料をあわせて述べられる考察を正文選択させることなども考えられよう。

第5問は近現代の日本経済に関するメモ形式の出題であった。問1は正文選択問題。内容は1910年代～20年代における工業化で、「在華紡」に関して知識を求められている点と、工業化の影響を理解していなければ判断ができない点で、日本史Aの受験者という視点では難問であったといえる。経済関係については、グラフの読み取りと工業化に関する説明文の正文組合せのような形式もあり得るだろう。問2は史料に関する語句と正文の組合せ問題。受験者が「震災手形割引損失補償令」の内容を把握し、想起することは難しいであろうが、史料を読み取っていくことで解答できる良問であった。問3は語句の組合せ問題。第4問と類似した出題形式であるといえる。経済史の基本的事項である「インフレーション」や「デフレーション」を理解しておく必要がある。問4は戦後の日本経済に関する年代配列問題。それぞれの文章から「東京オリンピック」「傾斜生産方式」「朝鮮戦争」を把握できれば平易な問題であった。問5は史資料に関する正誤の組合せ問題。Xは第二次

世界大戦の戦勝国を理解した上で、表を読み取ることで判断できる。Yは史料から1956年を見つけ、為替レートの切り上げの時期を照らすことで判断できる。ただし70年代以降の経済的な分野について苦手意識をもつ受験者も多く、教員には丁寧な指導が求められよう。問6はグラフの読み取りに関する正文組合せ問題。グラフを丁寧に読み取ることで解答が可能である。問7は近現代の日本経済に関する誤文選択問題。「鈴木商店」に関する知識があれば解答できる平易な問題であった。第6問を通じて知識のみで解答が可能な問題や史資料を読み取るのみといった形式に近い問題が多くみられた。経済分野や戦後史を苦手とする受験者には解きやすい部分もあったであろうが、冒頭のメモを活用する形式や考察とそれに合う史資料を考えさせる問題など出題の工夫も考えられる。

日本史B

「日本史B」について、設問数は大問6題、小問32題の構成で、昨年度と同様の問題数であった。出題範囲は原始（弥生）～現代（昭和戦後）までであったが、古代の範囲として縄文・弥生・古墳からの出題が少ない結果となった。出題のされ方も文化史の知識を問うような出題で、日本史Bの学習範囲内ではあるものの、時代の概観を確認するような出題の方が適切な設定であったと考えられる。一方で、近代以降の問題は昨年と比べると充実した出題となった。特に戦後史からの出題が小問で3問と特徴的で、出題形式や内容も質の高いものであった。出題形式は共通テストらしさが継続されたが、私立大学の入試問題との乖離がさらに大きくなってきた。

昨年度に引き続き、授業内の会話文をベースにしたプレゼンテーションやレポート課題などの生徒の学習環境に即した問題設定が盛り込まれていた。また、史資料の活用に注目が集まる中、今年度も資料問題では既存の知識や固定概念に惑わされず、出題された史資料から判断する問題が出題されているなど、情報処理能力を求める出題が増えている。

出題形式別では、正文の組合せ問題が7題、正誤の組合せ、正誤問題（正文）、年代配列問題が各5題、人物・事項の組合せ、語句の組合せ問題が各4題、正誤問題（誤文）が1題であった。今年度は、昨年まで減少傾向にあった空所補充の語句組合せが4問と増えたが、リード文中の単純な空欄補充は2問で、残りの2問は表中の空欄補充での8択問題や3つの語句の組合せなど、一定の思考を求める出題となり工夫がされていた。年代配列の問題が昨年度と同じく5問と引き続き多く出題された。ほとんどの問題が、関連する人物や歴史的事象の背景を理解し、大まかな社会状況を踏まえれば正答を選ぶことができる良問で、短絡的な暗記を助長せず、時代を通観する学習を促すメッセージ性のある出題になった。一方、文化史の内容で年代配列を出題すると、時代背景を読み取るというより、個別の歴史用語から時代を類推することになり、短絡的な暗記につながることから、扱い方の工夫を求めたい。

時代別では、過渡期を問う時代横断型の出題が12題と最も多く、時代ごとの知識・理解をもとに、各時代を比較する複合的な視野が求められた。各時代を問う問題では、古代では奈良期2題、平安期1題、中世では鎌倉期1題、南北朝期1題、戦国期1題、近世では江戸期5題、近現代では幕末期1題、明治期2題、昭和期2題、戦後3題であった。例年と同様、各時代の特徴を端的に理解し、整理する力が求められた。今年度は原始からの出題が文化史1問のみで昨年よりも減少した一方、戦後史は3題出題された。来年度以降も、出題する時代の均衡が保たれるよう配慮をお願いする。

分野別では、複数の分野にまたがる混合問題が10題と例年同様に多かった。今年度も昨年度同様に中世・近世からの出題が社会経済の分野に偏っていたこともあり、社会経済の問題の出題が13問と多かった。近世の出題は昨年と比べると外交や政治にも出題の幅は広がったがそれでも社会経済に偏りは否めない。他の大問でも出題に活用された史資料は社会経済との関連を問いやすいものが多かった。また近代の範囲では二つの世界大戦をテーマにしたこともあり、軍事外交が中心となっ

た。大問ごとの分野の偏りを是正するためにも、軍事外交と社会経済、さらには文化との関わり合いを読み取らせる出題など、多面的な視点で時代の変化や変遷を問うような出題を望む。各分野を問う問題では、混合問題も含めると、政治が9題、社会経済13題、軍事外交が14題、文化が9題、混合が10題であった。今年度は例年に比べれば文化に関連する問題が増加し、受験者としては取り組みにくい出題もあった。一方で社会経済に関連する諸史料の中には、今年度も知識としては頻繁に取り扱われるが実際には読み解いた経験がない史料からの難度の高い出題もあり、戸惑った受験者も少なくないと思われる。以下、詳細を見ていく。

第1問は印刷物の歴史をテーマとする出題であった。前半部分は「百万塔陀羅尼」を取り上げて奈良時代から織豊時代にわたる出題となったが、実際に印刷物との関連からの出題は問1のみで、他の2題はリード文の下線部に関連する出題であった。身近な品物から歴史を考えるという視点でいえば、歴史総合への移行という視点でも適切な問題設定であるが、今回の出題ではその視点は生しきれていない。現代の印刷物との違いや、時代ごとの印刷物の特徴などを、受験者にとっては初見の資料から考察させるなど、工夫できたであろう。時代横断という第1問の特徴を活かし、意義のある出題を期待したい。問1はリード文から「百万塔陀羅尼」の成立の背景が説明されており、それを年表中の項目から推察して時期を答えさせる問題で、年代配列によらずに時代の推移を問う効果的な出題であった。史資料の活用という観点や歴史事象の因果関係に着目させるという観点で良問であった。問2は「選択肢Ⅱ」で活字の話題が上がっているが、正答を導く上では関係がない。三つの選択肢Ⅰ～Ⅲも日本と朝鮮の関わりという点では共通点はあるが、それぞれが因果関係ではつながらず、選択肢中の歴史用語から時代を類推して並び変える。各選択肢の年代も室町から戦国と狭い。選択肢ごとに時代の概観を把握して解答できる出題を期待する。問3は二つの史料の読み取りで史料間の関連性は問われていない。共に資料を丁寧に読み取れば正答を導けるが、史料Ⅱは織田信長の楽市に関する命令で、「織田信長は楽市楽座」と思い込んでいると誤ってしまう。史料の丁寧な読み取りを求める問題であるが、教科書を用いた学校の学習で織田信長の特徴の一つに「楽市」の説明を受けた受験者に対して、それを否定することをあえて選ばせ正解とすることには疑問が残る。後半部分は江戸時代以降の出題であった。問4の空所アの補充は「16世紀後半」から「宣教師」を選ばせるなど時代の概観を意識させる上で効果的な出題だった。空所イの補充も用語の穴埋めではなく、その歴史用語の特徴を選ばせる出題で工夫が見られた。問5は文化史からの出題であったが、地図を用いて私塾の位置を資料として提示するなど工夫も求めたい。問6は史料の読み取りと知識の組合せを問う問題。史料の読み取りは平易で明治期以降の出版物の知識も正答は選びやすい出題であった。史料の示す江戸時代と、明治時代の出版物の関連性は特に指摘されず、二択問題の組合せになっている。第一問のまとめの間でもあるので、時代を通ずる歴史的な視点や問いかけの工夫を求めたい。

第2問は古代の食物をテーマとしている。前・後半ともに会話文をリード文にして史資料を活用した出題である。問1は原始から「甕」と「甗」に関連する出題であった。資料で示された写真は「甕」「甗」なのかという点と、それぞれの用途の説明が正しいかを問う問題で、資料を提示しながらも知識を問うている。時代の変遷や特徴を考えさせる出題の工夫がほしかった。問2は史資料の読み取りを組み合わせた出題であるが、実際は二択の組合せであった。木簡からの情報を用いて考えるところでは旧国名をある程度把握しておく必要があった。授業でも空間認識を促す必要があることを示唆する良問であった。問3の年代配列は文化史をテーマにした選択肢であった。文化史関連の歴史用語だけで判別する問題であるが、歴史用語を知っているか否かで正誤が決まる。文化が形成される時代背景や海外との交流なども含めた選択肢が並ぶと思考力を問えるだろう。問4は誤文選択の問題で、史料を丁寧に読み取れば正答を選べる。問5は表中の空欄3か所を埋める語句

選択の問題であった。特に空欄アとイの選択は二択とは言え時代の推移などを考察する必要があり、短絡的な暗記では対応できない設問となっていた。解答に時間を要するが、歴史的な知識と情報処理能力とを測る出題としては良問であった。

第3問は中世社会の特色についての出題であった。第2問と同様に生徒の会話文をリード文に問題が設定されている。問1は中世の朝廷に関する年代配列の問題であった。鎌倉幕府初期、鎌倉末期、室町幕府期と、特徴的な時期が選択肢で説明されており、「中世の朝廷」という設問の設定にも合致していて良問であった。問2は永仁の徳政令に関連する二つの史料の読み取り問題であった。この設問も鎌倉期の史料として著名な永仁の徳政令の本来の意味と実際の運用上の問題をテーマにした設問である。問題の構成は、永仁の徳政令の内容を資料読み取る形式で答えさせ、実際の書状を素材に、永仁の徳政令が意図的に「読み換え」られ、訴えに悪用されていたことを読み取らせるもの。実際には会話文中の資料2が南北朝の時期の史料であることが指摘されており、史料の読み取りをせずとも正答を導ける。史料を読み取らせるだけではなく、その史料が出された背景や後世への影響など、歴史の推移変遷上その史料が果たした役割を問うことも歴史の力をはかるうえで必要な観点である。著名な史料を扱う時こそ、歴史的な意義について問う設問を期待したい。問3は南北朝時代の文化史についての出題で、作品と著者を選ぶ単純な構造であった。短絡的な暗記学習を助長するような出題は避けていただきたい。問4は分国法に関して史料を選択させる新しい形式の問題であった。出題された史料はどれも著名であり取り組みやすい。また、XYの説明内容がそれぞれの史料の読み取りになっているので、思考力を問うのであれば、それぞれの条文が想定した具体的なケースを選ばせる出題も考えられよう。問5は中世社会の特色に関連して「実力を行使して問題を解決しようとする事例」を選ばせる設問。時代を概観する、あるいは理解する力を測るという意味では良問だが、国語的な要素の強い問題であった。

第4問は近世の輸出入品と社会・経済との関係がテーマであった。問1は空所補充であるが、同一の空所が複数の会話文中に設定され、その文脈から考えることができた。会話文が効果的に生かされている。リード文の中には下線を引くだけに終始するなど問題の設定と設問に関連性が見られないものがある中で、この第4問は会話文を読むことで設問に取り組みやすくなるように設計されている。学習の場面や生徒のレポートなどを題材にする設問は多いが、形式だけでなくリード文も一つの「資料」として活用できるような出題を今後も期待したい。問2は「江戸幕府がポルトガル船の来航を禁止するに至るまで」に起きた出来事の年代配列である。「江戸幕府がキリスト教を禁止するに至るまで」と読み替えることができれば難しくない。禁教令を出すこと、貿易港を限定すること、禁教の影響を一因とした一揆が発生したこと、の並び替えは歴史的な事象の変遷についての理解度を測る問題として良問である。問3は長崎貿易の基礎的な内容を問う問題。史資料の活用が進む共通テストではあるが、文字史料が増えている一方で数値を読み取り、表から変化を推察する出題が減少傾向にある。表やグラフの数値の読み取りから考察させるような出題にも期待したい。なぜ中国との交易が増えたのかを、中国側の視点で考えさせるような年表や資料を読み取らせる出題も考えられよう。問4は史料の読み取り問題。注釈を丁寧に読み解けば史料内にすべての根拠を見出すことができるため難しくはないが、単なる読み取りで終始せず、歴史的な観点で設問が設計されていればよかった。問5は問4と同様に史料を読み取らせて選択させる二択と、時期を判断する二択の組合せになっている。史料は要約なので読み取りは難しくない。時期判断についても豪農・定免法という用語で時期を判別できる。

第5問は日本史Aとの共通出題であった。高校生の探究発表原稿という設定の原稿がリード文になっているが、文章だけに終始しており、従来型のリード文に類似した出題となった。「探究」らしく「問い」を設定し、仮説を立てて、史資料を用いて考察する流れを出題に生かすなどの工夫が期

待される。問1はリード文内の空所補充でアは知識問題、イは前段の永井荷風の『洋服論』の内容を読み取る出題だが、いずれも簡素な出題であった。アについては、地図を用いない空所補充で「箱館」を答えさせるのではなく、なぜ「箱館」での貿易が開始されたのかを考えさせるのも一案であった。問2はグラフを用いた輸入の変化についての出題。探究の原稿と関連性は特に示されていない。問3は史料の読み取り問題の形式をとるが①②は史料文に関わらない知識問題で、③④は史料文からの読み取り問題である。ここは史料の読み取りで統一できればよかったと思われる。問4は文化史からの出題。下線部分後半「西洋文明の影響を受けつつ、同時に日本の伝統を引き継いでいるものがいくつも存在する」について、正しいものを選ぶという設問だが、結果的には、歴史的な誤りが含まれている選択肢を消去して正答を導く設問になっている。これは下線部分の表現は関係なく、明治時代の生活様式・社会制度について正文を選ばせる問題と変わらない。明治時代の文化に日本古来のものと西洋から取り込まれたものとが混在する中で、それを分類・整理し、特徴を掴むような出題であれば探究的な出題としても成立したであろう。

第6問も日本史Aとの共通出題であった。二度の世界大戦後の日本と国際社会の関係をテーマに発表するという設定でそのメモをリード文としている。端的に情報がまとめられ、問題を解くための資料としては読み取りやすい。問1はワシントン会議で締結した条約を選ぶ問題で、史料文自体が選択肢となる点が特徴。特徴的な用語を踏まえて推察できる。知識と史料の読み取りの力を必要とする良問であった。問2は「不戦条約を締結した内閣」について答えさせる出題。ある内閣の時期の出来事を問う出題は短絡的な暗記学習を助長しかねず、関連性ある思考過程を想定した出題を期待したい。難易度は上がるが、普通選挙の実施を問う場合に、無産政党の躍進から共産党員の取締りが強化されたことなどを扱うような例も考えられる。問3は史料の読み取り問題。史料文中は「満鉄以外」とし、設問文中は「満鉄の警備を」として誤文と判断させる問題。「以外」を読み落とさなかったかどうか、を問う問題になっているため史料の読み取りとしても少し物足りない。問4は1930年代の日本の外交についての正文組合せ問題ではあるが、歴史的な誤文が二つ指摘できるので、正答を選びやすい。問5の正答に「明るく伸びやかな」という表現があるが、現行日本史Bの特定の教科書の一部に使われている表現そのままである。昨年度にも同様の事象があったが、特定の教科書を使っている受験者だけが有利になるような出題は避けていただきたい。そもそも「明るくのびやか」という表現は主観によるところも大きく、この選択肢中の前段の「抑圧的な風潮」に対応する表現としても適切ではなかったと考えられる。問6は沖縄に関連する年代配列は、通史的な学習だけでなくテーマ史として学習する必要性を示唆する問題である。問7は空欄アのソ連とインドは両国が講和会議で調印していないことは想起できて、出席して調印しなかったのか、そもそも出席しなかったのか、という部分で判別が難しい知識問題となった。全面講和ではなかったことを考えさせる意味はあるが、調印しなかった、講和会議に出席しなかった国々の主張にはどのようなものがあったかを、他国から見た講和について史料を用いて考えさせる出題も考えられる。

3 総 評・まとめ

今年度は、新学習指導要領に基づく共通テスト実施を一年後に控えて、教育現場では期待と不安とが交錯しながらも、少しずつ建設的な試行錯誤をし始められるようになった一年であった。

「日本史A」は全体を通じて昨年同様に史料や表、グラフなど多様な資料を活用し、思考・判断させる意図がみえる問題が多い構成であった。受験者の学習範囲からは解答しにくい知識問題も極力避けられていて、学習到達度ををはかるために適切な難易度であったといえる。出題方法は生徒のレポートや発表原稿など、探究学習の場面などを想定した形で次年度以降の出題にもつながるといったが、出題の内容は従来の下線部や設問文と史資料によって判断できる問題が多かったといえる。

各大問の中で思考力・判断力を問うための案を記載したが、今後様々な工夫をしていく必要がある。文化史に関する出題は例年少なかったが、今年度は大幅に改善され、苦手としている受験者にとっては得点しにくかったかもしれないが、授業の視点では改めて学習方法も含めてその重要性を認識できるものとなった。ただ、時代については平成以降がなかなか出題されないが続いている。歴史総合では「グローバル化と私たち」という項目で今まで以上に現代史を学習されることが予測されるので、次年度以降の出題に期待している。この数年で資料活用から思考・判断する問題が次年度以降も出題されてきていることで、教員にとっては指導の方向性が、受験者にとっては学習の方向性がより明確になっていくと考えられるため、今後も構成上の継続をお願いする。

次に「日本史B」は、全体を通して各分野の特徴を網羅した内容であり、例年通りに豊富な史資料を活用し、思考・判断につなげる出題が多く見られた一方で、今年度は地図を用いた出題がなかった。史資料の偏りに配慮をお願いしたい。問題の内容は全体的に受験者及び指導にあたった教職員にとって、不易と流行の均衡のとれた出題であったように思われる。ただし、資料活用に主眼が置かれ過ぎ、受験者の負担が大きくなっているのも事実であり、日本史Bの学力を測るに適切な分量になるよう均衡をとっていただきたい。また、資料読み取りとはいえ歴史的な知識よりも国語的な読解を必要とする問題も含まれ、教科の専門性も十分に発揮できる出題形式をお願いしたい。受験者の既習の知識が思考を働かせるうえで妨げとなるような資料の選定や出題にも配慮していただきたい。時代による出題に偏りはやや改善したものの、今年も見られた。特定の時代に出題が集中しないように引き続き配慮をお願いする。また出題形式について、年代配列問題が昨年より増加していたが、結果的に個別の知識を問うことで短絡的な暗記に依存するような問題も散見された。思考・判断・表現を基礎とする学習によって解くことができる設定をお願いしたい。